

## 現代社会におけるシオニズムと伝統的反ユダヤ主義との関係

トニー・グリーンスタイン（ユダヤ人の反シオニストで BDS 運動活動家）著、脇浜義明訳 \*脚注は訳注  
パレスチナ・クロニクル、2025年11月15日



政治的シオニズムの創始者、テオドール・ヘルツル。(Photo: E.M. Lilien, via Wikimedia Commons)

西洋における反ユダヤ主義はほぼ消滅点まで低下しており、おそらくシオニスト運動がユダヤ人をイスラエルのジェノサイドと結びつけるためにのみ存在していると言えるため、彼らはそうした矛盾と共存できるのだ。

イスラエルが、根から反ユダヤ主義の極右に秋波を送っているとロバート・インラケシュは論文『ニック・フエンテスとイスラエル問題：MAGA 陣営内の「内戦」』の中で書き、次のように指摘した。

「イスラエルの戦略は馬鹿げている。彼らは自分たちとイデオロギー的に一致する極右との連帯を求めているが、自分たちが極右が嫌悪・排斥するユダヤ人であることを忘れている。」

実際には、イスラエルの戦略は馬鹿げていない。それどころか、それはシオニズムの性格から来る論理的帰結である。イスラエル人がユダヤ人であるという指摘も場違いである。イスラエルでは人種または民族によってユダヤ人となり、我々のようなディアスポラでは宗教によってユダヤ人となる。戦略が馬鹿げたことになるのは、イスラエルの外のユダヤ人、つまりユダヤ教徒が、反ユダヤ主義を掲げる右翼運動と繋がることは自分たちの利益にならないと分かっているのに、シオニズムを支援するときである。この馬鹿げた、狂気に思える戦略を理解するためには、シオニズムの発端に遡らなければならない。

シオニズムは反ユダヤ主義、特に1881年のオデッサ・ポグロム<sup>1</sup>への反応として生まれた。しかし、それはユダヤ人差別に対する他の運動、生活の場でユダヤ人の権利を守り広げるユダヤ人の運動とは質的に異なっていた。シオニズムは、ユダヤ人は生国の一員ではなく、自分らのユダヤ人国を持っていうユダヤ人を排除する反ユダヤ主義の談話を受け入れた<sup>2</sup>。「近代シオニズムの父」と呼ばれるテオドール・ヘルツルが1896年に出版した小冊子は『ユダヤ人国家』という題名であった。

ヘルツルは、ユダヤ人が他人の国に住んでいることから反ユダヤ主義が生まれたので、差別の原因を作ったのはユダヤ人自身だと論じた。もっとひどいことに、反ユダヤ主義がはびこるのは、ユダヤ人が平等国民として解放されたからだと論じた（『ユダヤ人国』25頁以降）つまり、平等な権利を求める闘いが反ユダヤ主義の原因だということのである。

ヘルツルは、反ユダヤ主義が描くユダヤ人のステレオタイプを認めて、反ユダヤ主義の直接原因として次のように述べた。

「我々が二流の知識人を過剰に生み出すこと・・・落ちぶれたときは革命プロレタリアートになり…出世すると嫌悪される金満家になる・・・」（『ユダヤ人国家』26頁）

従って、「移民は、民族的優位性が保証されなければ意味がない」（『ユダヤ人国家』29頁）——つまり、ユダヤ人優越国家作りの移民となる。

ヘルツルは、最初から、自分の主張の主たる支持者は反ユダヤ主義者になることを意識していた。「シオニズム運動推進には多大な労力を必要としない。反ユダヤ主義が必要な推進力を与えてくれる」（『ユダヤ人国』57頁）彼は、ユダヤ人の移住が非ユダヤ人にとって喜ばしいことになると考えた。「今や反ユダヤ主義となった国々に素晴らしい時期が始まるであろう。」（『ユダヤ人国』73頁）彼は、「人々は私が反ユダヤ主義者に武器を与えていると言うだろう。私が真実を認めているために」（『ユダヤ人国』77頁）

従って、多くのユダヤ人がシオニズムをユダヤ人の反ユダヤ主義形態と見做したのは驚くことではない。また、多くの反ユダヤ主義者がシオニズムをユダヤ人の中に自分たちと類似した運動を見たのも驚くことではない。ヘルツルは日記の中でもっとはっきりと書いている。

「反ユダヤ主義は我々にとって最も当てにできる友人である。反ユダヤ主義国家は我々の同盟国である。」（『日記』84頁）<sup>3</sup>

ヘルツルは「反ユダヤ主義は恐らく神の善意を含んでいる」（『ユダヤ人国』231頁）と思った。ヘルツルにとって、反ユダヤ主義は実際に役に立つものであった。

「それはユダヤ人を害するものではない。私はそれをユダヤ人の性格形成にとって有益だと考えている。集団教育になるからだ・・・教育は困難を通じてのみ達成される。」

他のシオニスト、例えばロシア生まれのヤコブ・クラツキンは反ユダヤ主義にもっと理解的態度をとった。

---

<sup>1</sup> ポグロムと分類される最初事件で、オデッサで起きたユダヤ人に対する暴動。1881年～1884年にウクライナとロシア南部に広がり、これ以降「ポグロム」というロシア語が一般化した。

<sup>2</sup> シオニストは、ユダヤ人がフランスがフランス国を持っているように、自分の国を持たないから差別されると主張し、キリスト教ヨーロッパも「厄払い」になるとして、その主張と運動を支援した。

<sup>3</sup> 差別を逃れて移民してくれるのを期待して、シオニストはユダヤ人迫害を歓迎した。後に、ナチとさえ協力した。

「反ユダヤ主義の正当性を認めなければ、我々自身の民族主義の正当性を否定することになる・・・我々の権利を減じようとする反ユダヤ主義者から身を守る協会を作るよりは、我々の権利を守り、平等に扱う友人たちからユダヤ性を守る協会を作るべきだ。」(自ジェイコブ・バーナード・アグス著『ユダヤ史の意味』第2巻、425頁)

イスラエルの歴史家イーガル・エラムは次のように書いている。

「シオニズムは反ユダヤ主義を異常で、馬鹿げた、倒錯的で、周辺の現象と見ていなかった。シオニズムは反ユダヤ主義を自然の一つの事実、標準的定数、非ユダヤ人が自分たちの中に存在するユダヤ人に対する関係の基準と見做していた。ディアスポラのユダヤ人の異常で、馬鹿げた、倒錯的状况に対する非ユダヤ人のほぼ正気の反応と見ていた。」(イスラエル労働党機関紙『オット』no.2, 1967)

つまり、シオニズムは、反ユダヤ主義があるからこそユダヤ国が成立したので、ユダヤ人自身だけでは移民してユダヤ国を作る誘因は成立しなかったであろう。このことから、ヒトラーとナチの台頭で実に邪悪な様子が生まれた。シオニスト指導部はユダヤ国建設のためナチを利用できると考えたのだ。その間の事情を、批判的シオニスト学者のノア・ルーカスは次のように書いている。

「ヨーロッパ大陸でホロコーストが起きた時、ベン・グリオンはそれをシオニズムにとって決定的チャンスと見た。他の指導者以上にベン・グリオンはヨーロッパの混乱と大殺戮の中に巨大な可能性を感じ取ったのだ。・・・平和な時代では・・・シオニズムは世界のユダヤ人大衆をパレスチナへ移住させる力はなかった。ヒトラーの発揮する恐怖の力をシオニズムにとって有利になるように結びつけるべきだ、と考えたのである。・・・1942年末までに…ユダヤ人救済よりはユダヤ国建設がシオニズム運動の主たる関心となっていた。(『イスラエルの近代的基礎』187～8頁)

世界的に著名な伝記作家エーミール・ルートヴィヒ(1881～1948)は、シオニズム運動のナチに対する一般的態度を次のように書いた。

「ヒトラーは数年もすれば忘れ去られるであろうが、パレスチナでは見事なモニュメントを得るだろう。ナチ台頭は歓迎すべきである・・・ユダヤ教にまったく無関心になったように見える数千人のユダヤ人が、ヒトラーのおかげでユダヤ教徒に戻された、その点で、私は個人的にヒトラーに感謝している。(エイタン・ブルーム著『アーサー・ルッピンと近代ヘブライ文化の創造』417頁)

シオニスト民族詩人のナフマン・ビアリクは、「ヒトラー主義は、同化されて絶滅しつつあったドイツ・ユダヤ人を救ったのかもしれないと言った(同上)。マパイ(労働党)の創設者で、労働党機関紙『ダヴァル』の編集者で、ベン・グリオン の事実上の副官であったベルル・カツネルソンはヒトラー台頭を「かつてない、そして今後もあり得ないシオニズム建設と繁栄の機会」と見た(フランシス・ニコシア著『ナチス・ドイツにおけるシオニズムと反ユダヤ主義』91頁)。ベン・グリオンはもっと楽天的であった。彼は、ナチスの勝利は「シオニズムにとって肥沃な力となるだろうと言った(トム・セゲフ著『7番目の百万人』18頁)<sup>4</sup>

シオニストと異なり、大方のユダヤ人のヒトラーに対する反応は恐怖であった。直ぐに世界のユダヤ人はドイツに関するすべてのもののボイコット運動を始めた。しかし、この新しい展開に大に関心を抱くシオニスト指導者は、反ナチ活動に強硬に反対した。1933年6月21日、ドイツ・シオニスト連盟はヒトラー宛ての書簡で次のように書いた。

---

<sup>4</sup> 脇浜義明訳『7番目の百万人』ミネルヴァ書房。

「シオニズムの実現を妨害するのは、ドイツの発展に怒って反対する外国のユダヤ人だけです。ドイツ・ボイコット運動は、本質的に、非シオニズム的です。何故なら、シオニズムはドイツと戦うこと望んでいず、ドイツにユダヤ人国建設を理解してもらい援助してもらいたいのです。」

その2か月後、シオニスト指導者はシオニズム運動とナチ・ドイツとの通商協定を結んだ。有名な「ハーヴァラ協定」である<sup>5</sup>。

現在のイスラエル国と反ユダヤ主義極右との同盟関係は決して異常で「偏執狂的」ではなく、まったく正常である。反ユダヤ主義の定義を変えて、反対者を「反ユダヤ主義」として攻撃するようになった。「新しい反ユダヤ主義」が誕生した。ユダヤ人嫌悪や差別や偏見が「反ユダヤ主義」ではなく、イスラエル国への批判や敵対、反シオニズムが「反ユダヤ主義」となった<sup>6</sup>。非ユダヤ人がユダヤ人をどのように思っているかはどうでもよい。重要なのはユダヤ国をどう思っているかだ。

いずれにしても、シオニストの考えでは、非ユダヤ人はすべてユダヤ人嫌悪の反ユダヤ主義を血液の中に持っている。2,000年前から遺伝として受け継いできたのだ。(レオン・ピンスカー著『自力解放』1881, 5頁)

今年3月反ユダヤ主義との闘いの会議にイスラエルのディアスポラ・反ユダヤ主義対策大臣のアミハイ・チクリが世界の



名高い反ユダヤ主義者を招待した。これにはさすがの親イスラエル・ロビーのADL(名誉棄損防止同盟)でさえもボイコットした。多くのユダヤ人指導者もボイコットした。

ディアスポラ・ユダヤ人が、数は減ったが反ユダヤ主義で苦しんでいるのは言うまでもない。しかし、ディアスポラ・ユダヤ人がシオニズムに忠誠を誓い、反ユダヤ主義と闘争するというのは、矛盾した行動である。しかし、西洋では、ようやく反ユダヤ主義がほぼ消滅に近い状態になり、シオニズム運動がユダヤ人とイスラエル国壊滅とを結びつける形でのみ反ユダヤ主義が存在することを考えると、この矛盾を抱えていくことになる。

トニー・グリーンスタインはユダヤ系反シオニストであり、パレスチナ連帯キャンペーンおよびイスラエル製品ボイコットを支持するユダヤ人団体の創設メンバーである。長年にわたり反ファシスト活動家として活動し、『ホロコースト期のシオニズム：国家と民族のために記憶が武器化された経緯』の著者でもある。本稿はパレスチナ・クロニクルに寄稿したものである。

<sup>5</sup> この協定で約60,000人のドイツ・ユダヤ人がパレスチナ移住した。移住者はドイツ国内の資産を売却し、その金で英国パレスチナ委任統治領へ輸送するドイツ製必需品を買った。修正シオニストのゼエブ・ジャボティンスキーや非シオニスト・ユダヤ人、ナチ党员、ドイツ国民らが批判した。金のないユダヤ人の受け入れはなく、アウシュヴィッツへ送られた。

<sup>6</sup> 国際ホロコースト記憶同盟もシオニストの圧力で「反ユダヤ主義」の解釈を変更した。米国大学当局も親パレスチナ学生運動を「反ユダヤ主義」として取り締まっている。